

キャラクター名
レヴォニア・A・マリオネット

プレイヤー名

シンドローム	ウロボロス		ワークス	UGNエージェントD	カヴァー	留学生
	ウロボロス					
オプション			年齢	14	性別	中性的
覚醒	生誕	衝動	破壊	初期侵食率	43 %	
出自	兄弟姉妹	経験	実験体	邂逅	新条 梢	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	28
肉体	2	0	0			2	行動値	8
感覚	2	0	0			2	(非装備時)	8
精神	4	0	0			4	戦闘移動	13
社会	0	1	0			1	全力移動	26

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			R C	1		交渉	1	
回避			知覚	1		意志			調達	1	
運転:			芸術:			知識:			情報: UGN	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	

合計装甲: 0 合計回避: 0

ロイス			
対象	感情(pos)	感情(neg)	消費
[01] 賢者の石/レネゲイドクリスタル	P	N	
善伊博士	P 好意	N 偏愛	
新条 梢	P 感服	N 劣等感	
	P	N	
	P	N	
	P	N	
	P	N	

最大財産P: 4 残り財産P:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
背徳の理	5	3	オート	至近	自身	自動	なし	
効果: 判定ダイス+Lv×2D、1点以上の与HPダメージ必要								
原初の赤:魔獣の衝撃	5	3	メジャー	視界	なし	対決	なし	
効果: 攻撃力:+5、+LvD、1回/1R								
原初の紫:妖精の手	2	5	オート	視界	単体	自動	なし	
効果: 判定ダイスの出目ひとつを10、Lv回/1S								
原初の黒:リミットリリース	1	8	オート	至近	自身	自動	100%	
効果: C値-1、1回/1S								
コンセントレイト:ウロボロス	3	2	メジャー	なし	なし	なし	なし	
効果: C値-Lv								
	★							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

UGNの暗部にて密かに研究されていた「ウロボロス」シンドロームの数少ない適合体であり、幼いながら現場の第一線で活躍する本部所属のUGNエージェント。エージェントとして及第点とも言える基本戦闘力は勿論、どんなジャームであろうとも必ず穿つ一撃必殺技の威力は他の追随を許さず、緊急性の高い任務へ頻繁に駆り出される。優秀な自分自身を誇りに思っており、少々自信過剰であり生意気な面もみられるが、年相応のイキリと見れば可愛らしいものなはずだ。反面、自分以上の素質と才能を持ち合わせる者や、恵まれた環境にいないにも関わらず、毎回の如く想定以上の成果を持ち帰る者などには密かにライバル心を燃え上がらせることもある。

UGNの暗部側寄りの研究施設による「最上の素質を持ち合わせる個体に最古のシンドロームと最強のクリスタルを適合させ、無敵のエージェントを造り出そう」という実験の下で生まれたのが彼である。コードウエルの離反などもあり研究の進捗は芳しくなかったが、この中で彼は特異的な力の数々を受け入れながらも安定性を保ち続けたばかりか、その力のすべてを存分に振るうことが出来た。UGN側の切り札としてその存在はひた隠しにされてきたが、コードウエルの反UGN宣言、マスターレイスの強襲そしてインフィニティコードの実態が明らかになったことで、晴れて日本での実戦投入が決まった。最初のうちは自分一人で何でもできるという万能感に取りつかれていたが、経験と技術に優れたエージェント達、持ち合わせる実力の限界を易々と超えるチルドレン、そして何より…新条 梢という才覚の塊との邂逅によってその認識が揺れ始める。恵まれた環境下で無敵の才能を与えられた自分が、なんでもないなんにもない彼らに負けるわけにはいかないと空回りにしている時期もあったが、現在では協調やコンビネーションの大切さに徐々に気づき始めている。